
悪魔のいる村

菜花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔のいる村

【Nコード】

N7637D

【作者名】

菜花

【あらすじ】

（誤字脱字訂正しました。まだあるかと思いますがご覧ください。）
歩美が春休みにキャンプにいきたいとい………。ファンタジーですコナンにファンタジーだめとおもう方ご遠慮下さい。
苦情はつけけません カップリングありません

第一話〜昼休み〜（前書き）

ファンタジーです。いいのでしたら前にお進み下さい。

第一話　昼休み

帝探小学校

昼休みいつものように賑やかな教室。いつものような五人がそこにいた。

「ねね！　また博士に頼んでキャンプ行こう？」
休み時間に少年探偵団がコナンの席に集まった。

「え？　急にどおしたんだよ歩みちゃん？」
コナンが驚きながら、歩美をみた。

「もうすぐ春休みだよ？　思い出つくろうよ！！」

歩美の言葉に元太と光彦が手を上げた。
「いいじゃん！！　キャンプいこうぜ」

「そうですよ！」

笑いながらズンズンとコナンのまわりに接近した。
「わかったから、落ち着けて！」

三人に押されしぶしぶ了解した。

次の日

ランドセルを片付け席につくと三人がよってきた。

「ねえ！ 大丈夫だった？」

歩美はニコニコしていた。

「ああ、喜んでたよ」

「じゃあみんなでいこう！！ ね！ 哀ちゃん！」

「え？ ええ」

キョトンとした灰原に歩美が笑いかけた。

「良かったな。灰原」小声でコナンが囁いた。

灰原は“何が” と言おうとしたが歩美にいろいろ聞かれてききかえせないまま授業に入った。

放課後

いつものように前に歩美、光彦、元太があるきその後ろに灰原とコナンがいた。

「ねえ？何が“良かったな”なの？」

「いや、最近オメー元気なかつたから」

頭に手を組んで空をあおいだ。

「今回のキャンプオメーを元氣付けるための計画。だから良かったなって」

「あら？心配してくれてるのかしら？」

「さあな。まあ、あいつらは心配してたぜ？」

「……」

「ほら、行くぞ」

コナンは灰原に声をかけ小走りて三人のところへいった。

第一話〜昼休み〜（後書き）

ありがとうございます。

書いてみたいと思いかきました。見てくださる方これからもヨレシクお願いします。

第二話　準備

「春休み」

博士の家に三人があそびに来た。

「明日ですね!」

「だね!! あれ? コナン君は?」

「まだきてないわよ」

地下から灰原が上がってきた。

「おっせえな。あいつ」

元太が愚痴をいいながらソファーに座った。

「遅いつてまだ予定時間になってないぜ? 元太」

リビングのドアが開きコナンが入ってきた。

「コナン君! おはよう!」

歩美はキラキラした顔でコナンのところに歩み寄った。

「げ、ほんとだ。集合時間までまだ十分もあるぜ! まだまだ朝御飯食べてこれば良かった」

シヨンボリする元太にみんなでわらった。

「んで、なんでここによんだんだよ」

「そりゃもちろん」

「「「もっていくもの確認するため」」」

三人の声は博士のいえから筒抜けるほどの声だった。

「さ！ 始めましょう」

光彦が自分のリュックサックを机においた。

「うん！」

「おう」

歩美も元太もリュックサックを机においた。

「一時間後」

「これで全部ですね！」

荷物をリュックサックにもどし、手作りチェックシートに丸をつけていった。

「後は！」

「車！」

三人は駆け足で車の側に行った。

「よし、テントはつんだな！」

「燃料も満タンですよ!!」

「タイヤも大丈夫!」

三人はあちこち車を点検してまわった。

「これで明日いけるな!」

「だね!」

「ですね」

三人のはしゃぎ声は止まることなく響いた。

「コナン君たちも大丈夫?」

リビングに戻ってきた歩美が二人に聞いた。

「あ、ああ」

「大丈夫よ」

「良かった! 博士! 明日どこにいくの? 山? それとも海?」

「山じゃよ」

博士は苦笑混じりけで答えた。

「そっか! 楽しみ!」

嬉しそうに二人のいるところに行った。

第二話〜準備〜（後書き）

本日二話目今日は多分三話または四話更新する予定

第三話　始まりの声

「キャンプ場」

ビートルを駐車場に止めるや早いわで三人駆け出した。

「スゲー凄い田舎だな」

元太は大声をだした。

「哀ちゃん早く！コナンも！」

歩美はゆっくり車から降りてきた二人を急がせた。二人が駆け寄ってくるだけで歩美はニコニコしていた。

「これ、待ちなさい」

息をきらせて、博士は走ってきた。

「なな、キャンプと言えばなんだとおもっ？」

元太がみんなに聞く。それに呼応するかのように二人は声をあわせて答えた。

「肝試し」

楽しいそうにはしゃぐ三人を前に博士と並んであるく灰原とコナン。

「ね……ここってまさか」

「ああ。お化けすなわち忌まわしい物が出るって言われるところ」
コナンが周りを見渡しながら答えた。

そこは最近話題の心霊スポットである村だった。

「あなたもしかして、信じてたりする？」

「いや？ でも……なんか心がザワザワしてんだよな」

灰原は少し驚いた顔をした。

「靈感……あるの？」

静かに聞いてみる。

「ねえよんなもん」

素っ気なくかえされた。しかしコナンは下をむいた。

「ねえけど、なんか“ここにくんな”っていわれてるような感じがすんだよ」

手で頭を押さえる。少しふらつき灰原の肩を持つ。

「調子わるいの？」

「大丈夫だ。ちょっと目眩起こしただけだから」

「でも！」

「心配かけたな。もう大丈夫だから」

そのまま歩き出した。が、数歩あるきふらつき倒れた。

「ちょっと工藤君？」

駆け寄った灰原がコナンを起こした。激しく肩で息をする。

「し、新一帰ったほうがいいんじゃないのか？」

「大丈夫だから……少し寝れば大丈夫だから」
そのまま気をうしなつた。

“今日の夜九時子供たちを預かる”

低い声が頭に響いた。その声で目をさます。“時間だ”

また響く声。それと同時に博士の叫び声が聞こえた。

「おい！ 博士どうした！？」

起き上がり博士のところに駆け寄つた。

「新一！ 彼らが帰ってこんのじゃ！！ 肝試しに行ったつきり帰ってこんのじゃ」

今に泣き崩れそうな博士がコナンの肩にしがみつく。

「わかつたから。落ち着けて！ な？ 博士？」

自分の苦しさもそっちのけで博士をテントに入れた。

「俺、あいつらがしてくっからそこで大人しく待ってけよ！」

そついい残しコナンは皆がいなくなつた方に向かって走つた。

「歩美ー？ 光彦ー？ 元太ー？ 灰原！！」

叫んでみるが返事は帰って来ない。

“瓢箪がたちの湖へいけ”

男の人の声が頭に響く。

「誰だよ……」

頭に手をあてながら、木にもたれ掛かり聞いてみるしかし誰の声も響かなかった。

「瓢箪がたち？」

コナンはリュックサックから持ってきた地図を出した。

「あつた。ここか。ここから丁度北に位置てやがる」

少し休みまた走った。

第三話　始まりの声（後書き）

作者からのお願い

ここまででダメなカタbackしてくださいね…寂しいですが
しかし、大丈夫なカタ最後までお付き合い下さいm（　　）m

評価感想お願いします

第四話　探偵団

「一方探偵団たち」

ジャンケンをして元太と歩美、光彦と灰原のペアになった肝試し。

「ねえ、コナン君ずっと寝てるよ？　大丈夫なの哀ちゃん……」

心配そうに歩美は暗い顔になっていた。

「大丈夫よ。ただの寝不足だから」

「そつか。じゃあ行ってくるね！」

「ええ」

心配かけるわけにもいかず励ます灰原。

その後なかなか二人は帰ってこなかった。

「灰原さん？　探しに行きませんか？」

痺れをきらした光彦、灰原もまた二人のことが心配だった。そして光彦と灰原は二人を探すために薄暗くなった森へ入っていった。

「歩美ちゃん元太くんいませんか」

大声でよんでみる。しかし二人の声は聞こえてこなかった。その代わり二人の耳に聞き覚えのない声が聞こえた。

「おまえが、灰原哀か？」

その声は森一面にひびいた。灰原は警戒する、だが周りをみるがだれもない。

「二人を助きたいなら、こっちへこい」

光彦が身震いをする。今にも腰がぬけそうな光彦を横目に灰原はかんながえた。

「どうする？」

男の声はまた聞こえる。

「あなた何者？」

「詮索は不要だ。くるか来ないかどっちだ」
男の声が一段とさがった。

「分かったわ。行くわ」

承知したことにより二人とも気を失った。

（数分後）

灰原だけが暗い世界にいた。

「ちよつと、あのこたちは無事なの？」

暗い世界で拘束された状態の灰原は身動きさえとれなかった。

「さあな。無事といえば無事だ。あの子たちは囷だからな」

「おとり？」

「ああ、江戸川コナンを誘きだすためのな！」

灰原は驚いた。頭の回転が一瞬とまった感じがした。

「い、今何ていったの」

「二度は言わん。お前も手伝って貰う」

それが合図となり灰原の体が動かなくなった。

そして、意識さえも手放した。

「出来上がりだ。これからお前は俺の操り人形だ」

灰原に触れると灰原は男に従うようになった。

「まっつれ、工藤新一。これから面白いことになるだろう」

男は暗闇から灰原と共に姿を消した。

第四話ゝ探偵団ゝ（後書き）

3月入りました！

これからも

宜しく願いします

第五話　救出へ・歩美光彦

　瓢箪がたちの湖

「ここか」

コナンは湖の近くで足をとめた。

「居るんだろ？　出てこいよー！！」

叫ぶと草むらから歩美が現れた。泣きじゃくったであろう歩美。

コナンが駆け寄り支えようとしたしかし、歩美の手はコナンの首に回された。

「あ、歩美ちゃん？」

力じたいは弱かった。しかし、コナン自身満全な体じゃなかった。

「どうだ？　友達に殺される感じは？」

歩美から発せられる声。しかし全く歩美とは違う声だった。

「くっ……」

少し意識が朦朧とする。

「に……げて……はやく……」

本当の歩美声。歩美は軽く手を離す。

「げほ……げほげほ」

席が止まらない。また襲いかかろうとした歩美に麻酔銃をうちつけねむらせた。

しかし、コナンもその場で気絶した。

“早く起きなければ子供たちが死ぬぜ？”

コナンはゆっくり目を覚ました。

隣で寝ている歩美。かの女をつれ一旦もりからでて、テントに帰った。

「博士……歩美を頼む。絶対あの森にいかすな」

「え？ 新一君はどこに」

「あいつらを取り返しに行く」

「無理じゃ！ 明日探せばいいじゃろ！？」

「わりい……あいつらを見つけないきゃ明日が来ねえとおもつ。俺がなんとかしなきゃいけないんだ」

「しかし」

「絶対帰ってくるから！」

また森に向かった。そしてまた湖にいった。

「お前は俺に何してもらいてえんだ」

息を整えてから聞いた。

頭で響いていた声が目の前から聞こえた。

「お前の命がほしい」

「何!？」

「だが、命のかわりに戦え」

コナンの目がよりいつそうきつくなる。

「まずはお前の仲間からだ」

高笑いする黒い影。その後ろから現れた元太と光彦。手にはナイフ。男の命令に従う二人。まるで操り人形だった。

「楽しく見物させてもらうよ!せいぜい頑張って戦え。好きだろ?」

また男は消えた。

コナンは逃げる。それを追う二人。

声をかけるが全く無意味だった。どうにか二人を気絶させる方法を考えるが上手く思考がまわらない。

暗闇を走る、前に何があるかも解らない道をひたすら走った。

そして二人に目を向けた瞬間片足が水に浸かった。

振り向くと川だった。

そのまま川の中に転けた。

全身ずぶ濡れになる。川の中で乱れた息を整えていたのもつかの間、光彦がコナン目掛けてナイフを投げた。ナイフはコナンの頬をかすめた。そして川に入り近く。コナンは起き上がり後退りをした。

「おい！ 光彦！ 目を覚ませよ！」

なにも反応がない。しかしコナンは光彦の腕にいつもはしてないミサンガを発見した。

「なるほど」

先ほど投げた光彦のナイフを拾い上げる。自ら光彦に近づいた。そして振り上げた光彦の腕を掴みナイフでミサンガを切った。光彦がその場に倒れかかりコナンが支えた。

「良かった。多分もう大丈夫だろう」

光彦を抱き上げ元太に見つからないよう、川から上がり光彦を木にもたれさせた。

第五話 救出へ・歩美光彦（後書き）

ありがとうございます！！

まずは歩美から救出です
頑張れコナン！

次回光彦

では

第六話　救出へ・元太

光彦を木にもたれさせた後コナンは元太に歩みよる。

「あいつも、ミサンガかよ……」

少しため息をついた。元太はコナンにむかって走り出す。ナイフを振り上げたしかしコナンは透かさずにげる。犯人がよくおそってくることもあるコナンの体は軽々しくよけた。

振り回し続ける元太。光彦のように腕を掴めない。腕を掴もうとした瞬間もう一方の手でコナンの腕目掛けてナイフが降り下ろされた。間一髪で避けた。しかし腕に激痛が走った。見れば血が出る腕。それでも逃げ続けた。

「コ、コナン君……!」

遠くから聞こえる声。それは光彦だった。

「この森から出る……! 早く……! 博士のところに戻れ……!」

「でも、コナン君が……!」

「俺は大丈夫だから! 元太も大丈夫だから……! 早く行け……!」

目一杯叫んだ。光彦はまだ納得いかない状態で近づこうとした。

「来んな! 逃げろ……!」

漸く光彦は走り出した。光彦がいなくなり元太に集中した。避けることに限界が近づいてきた。全身全霊でナイフを交わす。

そしてもう一度腕を伸ばす。しかし、コナンの頬に衝撃が襲った。そのままコナンは地面に倒れ、触れば唇から血が出ていた。元太はすかさず、コナンの左肩を押さえ、馬乗りになりナイフを降り下ろした。コナンも負けじとミサングのついた腕を掴んだ。素早く切る。元太もまた気をうしなう。

「つつ……」

元太の重みで支えきれず倒れる。

元太の下敷きになったコナンは必死でもがき脱出した。そのまま、ハンカチで腕の止血をして元太を起こした。しかしおきない。かわりに男の影があらわれた。

第六話　救出へ・元太（後書き）

前に次回光彦ってかいてましたが実際は元太でしたね（苦笑）すみません

はい元太助けました！

次だれかわかりますね！でも今までのように一筋縄ではいきません！
だってこの話これからですから（笑）

次回灰原

評価感想お待ちしております！

おねがい感想だけでもいいから！誰か～～寂しいです！！
面白くないかもしれないけど頑張ってます！！

叫ぶ作者（＜―＞）

第七話　時間をねじめげ生きてる二人

元太を揺すってみるが起きる気配はなかった。

「なかなかいい見物になった。お前が一番扱いにくかったからな……その理由が少しわかったが気がする。まあ次の女の子でお前お陀仏だ」

「まさか!？」

一生懸命元太を起こしていたコナンの手が止まった。考えればわかること、今までいなかった灰原だった。

「お前と戦うべき相手はこいつだろ？　一番憎む相手。お前がそんな体になったのはこいつが作った薬。そしてお前が潰そうとした組織の一員。もう、体力も殆んどのこってまい。お前が殺られるのも時間の問題だ」

黒い影は高笑いをする。それはそれは楽しげに。

「お前はいつたい誰なんだ？」

「フツ知りたいか？　俺はただの悪魔だよ」

「なぜ、俺らをえらんだ？」

「時間をねじ曲げた罰かな」

「お前ら二人は時間に逆らって生きてる。だから殺しあってお互い死ねばいい。それにお前と違ってこいつは操りやすかった。お喋り

はおわりだ!!」

悪魔の叫びがあいづになったかのように、灰原が銃をうった。

“その子にはミサンガなどない”

頭に響いた声。痛みが激しくしゃがみ込んだ。

それでも容赦なく撃つ灰原。銃に集中してギリギリ避ける。ふらつく体で森に入って隠れた。

「んだよ。どうなってんだよ……夢なら覚めるよ!!」

少し焦りながら木にもたれ掛かる。頭痛がおさまるのを待ち森から出る。

灰原に少しづつ近づく。そして名前を呼んでみる。しかし無意味だった。

第七話　時間をねじめげ生きてる二人（後書き）

待たせていた方おまちとおさまです
灰原登場です！

灰原VSコナン始まり始まり

次ちょっとま灰原VSコナン

では

第八話　悪魔

銃の弾がうち終わるまでにげようと考えたが弾が無くなる気配は一向になかった。

灰原のスピードが上がり初めた。そして、避けきれずに足首をかすった。コナンは勢いよく転けた。

灰原はゆっくりコナンに近づく、額に銃口を押し当てられる。コナンは目を閉じた。

しかしなかなか打たない、不思議に思い目を開けた。目を開けて入ってきた灰原の顔は涙ぐんでいた。銃を持つ手が震える。悪魔との戦い灰原自身が懸命にやっていたのだ。

「くど……つくん」

自分の意思を取り戻しコナンを呼ぶ。

「ごめんな……さい」

小さな声はコナンに微かに届いていた。

コナンは立ち上がり灰原を抱き締める。

「もういいから。お前がやったことじゃない。だからもういいから」

慰める。懸命に戦ってる灰原を慰める。

しかし、灰原がコナンのお腹を殴った。

“少しの間ねむるがいい”

意識が遠退く前に聞こえた悪魔の声、そこでコナンの意識は遠退い

た。

次に目を覚ましたのは暗い世界。上も下も右も左もわからない世界だった。

そして誰かによつての拘束。振り返りわかつたのは灰原。縛られているわけでもないのに体が動かない。無言で立たされる忘れかけていた足首の痛みに顔をしかめた。

そして、背中を押され二、三步前に出た。

たちまち一ヶ所がスポットライトが当てられたように明るくなる。

「ようこそ。あの世とこの世の境へ」

豪華な椅子に座っている男の姿。しかし顔がはっきり見えない。ただ角が二本生えてるのがわかった。

「俺をどうする気だ」

男に睨み付ける。

「帰りたいなら、帰ればいいさ。帰れなければ一生ここで過ごせばいい。」

「灰原は？」

「取り戻してみる。そしたら自動的にかえれる」

「なら、返してもらつてよ」

不適な笑み勝算なんでない。だが彼女を取り戻せるならばコナンに
とつての支えとなった。いまだ生気のない灰原。
「俺が助けるから」

自分に言い聞かせるように灰原に視線を向けた。

第八話ゝ悪魔ゝ（後書き）

すみません！いろいろ間違いが多々ありました！

第九話が更新おくれます

まちがえて消してしまいました
すぐ書き直します。

第九話　戦い

真つ暗な世界で睨み合うコナンと灰原。周りはなにも見えないが二人の足元はほのかに光があった。そして灰原の武器が銃からナイフに変わっていた。

全てを確認した直後灰原がコナンに向かって走りだす。

隠れることができない暗闇でコナンはさけ続けた。徐々に灰原のスビードが上がり始める。それでも避け続けた。しかし灰原の周りに何か無いかを探しながら避けるのはきついものだった。

そして見つけた。

灰原からキラリと見えた細い糸、しかしそこに目を向け灰原自身から目を反らした一瞬元太に傷つけられた腕にナイフがかすった。

「っ……！」

止血した筈の腕からまた血が滲みでた。コナンは腕を押さえ、三歩ふらつきながら後退した。その動きは遅く灰原は一気に攻めコナンの首にてをかけ締め付けた。コナンの意識が遠退いていく。

“もう終わりか？”

頭の中で聞こえた声でコナンの意識は一気にもどり、自分の手で灰原の手を掴み力を入れてすり抜け素早くナイフで糸をきった。そして、一息をいれ安心感に襲われた。

「フフまだ終わっていない。人は愚かだ。一つのことが終わったと

おもえば安心し気を抜く。おまえも馬鹿な人間と同じだ。所詮人間だな」

何処からともなく悪魔の声が響いた。両手を地面につき肩で息をしていたコナンのまえに全く息の切れていない灰原が立っていた。全く感情のない灰原の顔が一瞬変わった。そして一步一步コナンに近づくと、コナンは立ち上がり怪我をした腕を庇いながら一步一步下がった。その間にも糸を探した。

第九話く戦いく（後書き）

お待たせ致しました。

すみません、遅くなってしまいました。出来上がったので投稿します（くーく）お騒がせしました。

まだまだ灰原との戦いつづきますよ。

では

第十話　悪魔・シーグ

コナンは他の糸の場所を探し続けた。発見できたのは肩二本足に二本だった。ボールを蹴るタイミングもなく灰原は近づきナイフを降り下ろした。そのナイフをコナンは素手で掴み驚く灰原の動きを一瞬止めた。その隙にコナンは灰原の両肩からつられた糸を切る。

灰原はナイフを離し、しゃがみ頭を押さえた。

それもチャンスといわんばかりの顔で後ろに行き、足の糸を切った。そして灰原は気を失った。

「へー。見事なもんだな。通りで俺がお前を操れないわけだ。」

「んで、お前は何者なんだ」

「弱い心に入り込み操り人形にかえる悪魔・シーグとでもよんでもらうか」

「どうして歩美たちまで巻き込んだ」

気を失ってる灰原を起こしつつ質問をした。

「お前をここに招くためだ。そして、ここでお前たちを殺し世間から工藤新一も宮野志保も初めっからいないようにするはずだった。二人を操り殺し合いさせるつもりだったのよ……！」

怒りに満ちた声が暗闇に響いた。

「俺がお前たちをころしてやる！」

シーグは一気に灰原に近づく。

「ここはやはりレディファストかな」

しかし、灰原の前に出たコナンにシーグの手がかかる。

「何故助ける？ この女がお前の人生狂わした張本人だろ？ 助ける理由などないはずだ」

手に力が入る。今日何度目になるかわからないくらい首をしめられる。もがいて勝てる相手ではなかった。

「人生……狂わした張本人じゃねえよ……こいつは……」

「何!？」

コナンの首から手が離れ地面に落とされた。

「こいつは、組織に操られてただけのやつだ。それに、無関係だったこの事件に首を突っ込んだのは俺自身だ。灰原は関係ねえよ」

怪我をしていない手で灰原の手を掴む。

「フッお前はこいつをどう思ってる？」

「さあな。ただの戦友かもしれねえ。でも、俺はもう人が傷つくのはみたくねえし、例えどんな人でも、助ける。お前がどう言おうと俺たちは元の世界に帰らせてもらう」

鋭い目付きでシーグをみる。シーグは笑う。

「クツクツクツ。出るだと？ 無理だここから逃げることも脱出す

「することもお前たちにはできん」

睨み付ける力がつよくなる。そしてまた襲いかかってくるシーグからギリギリで逃げた。

「灰原を助けたら自動的にかえれるんじゃないかよ？」避けながら叫ぶ。灰原を背負ったまま避けるが間に合うことなく灰原を傷つけまいとコナン自身に幾度となく体に傷がつく。

「馬鹿め。俺がそんな約束まもるわけねえだろ！それにまだ操られてる可能性もある。お前はもう終わりなんだよ！サツさと諦める。もう立つのも限界だろ？」

とどめと言わんばかりにシーグはコナン目掛けて襲ってきた。間一髪で避けるものの、避けきれず灰原の頬をかすった。

「自分が助かりたいが為に女の子の顔に傷をつけるとはな。ほんとに馬鹿だな」

それが反動となり灰原が目を覚ました。その瞬間辺りが眩しく光り、悪魔が消え瓢箪がたちの湖のそばで再度灰原は目をさました。

「ちょっと工藤君？」

側に一瞬に倒れてたコナンに声をかける。

うつすら目を開け灰原に笑みをみせた。

「無事……だっただんな」

体を動かせるような力はもうなかった。

「馬鹿……」

「それ以上馬鹿……って言うなよ？ 散々いわれて頭にきてっからよ……」

二人の和やかな会話、それを遮るかのように、コナンの頭の中に声がひろまった。

“ 終わったとおもっなよ ”

その声に苦しみコナンは気を失った。

第十話　悪魔・シーグ（後書き）

読んでくださいありがとうございます

悪魔の名前シーグ。

由来ないです

投稿する数分前に思い浮かんだ名前です。

帰って来ました二人！でも、まだまだ！

皆様大丈夫ですか？

無理為さらずに……。

では

第十一話　絶体絶命！??

気を失ったコナンを揺すってみたが気が付く気配がなかった。

傷まみれのコナンと一部記憶のないことなどを考え灰原自身がコナンを傷つけたことに顔を曇らせる。コナンの掌の傷を見て自分のハンカチで止血を施し博士のいるテントまで帰ろうとした。

「逃げるのか？」

後少しのところで声がした。その声が近づく。

「灰原……俺をおいて先へいけ！」

先ほどまで気を失っていたコナンの声がした。

「貴方その体でなに言ってるの？」

「いいから、説教なら後でいくらでも聞くから俺をおろしてさっさとこの森から出る！」

しかし灰原は下ろそうとせず走った。出来るだけはやくはしりつづけた。

「間に合わねえよ!! 下ろせ灰原!!」

そして出口の手前少し灰原が安心し気が緩んだ。その時、コナンが背中から落ちた気がして振り向いた。其処には、コナンの腕を掴んだシーグがたっていた。

「にげる……博士に知らせろ」

コナンが声を絞り出す。

「でも！」

「いいから！はやく！！」

灰原は狼狽えながら森の外へ出た。

悪魔はコナンの腕を離した。

「へー自分だけ犠牲になろうってか？ 大したやつだ」

「いや、お前を消すためにここに残った」

「その怪我で俺にかてるわけがない。それに右腕うごかんだろう」
コナンは左手で右腕を押さえながら自力でたつ。右手を動かしてみるが動かない。その代わり今までになかった激痛におそわれる。そして気付く。骨が折れてるかもしれないと……

「お前をもう一度あの闇へ連れていく」

「そしたらアイツらに手をださないか？」

コナンは力なく睨む。シーグは高笑いをしながらコナンをみた。

「子供達はな。だが彼女は別だ！」

「あいつも関係ねえだろ！？」

「お前彼女がホントに無関係だと思ってるのか？ 彼女のせいでお前はそんな体になったんだぞ？ 彼女さえ居なければお前はふつうの高校生だった筈だ。彼女を憎んでるんだろ？」

言い返せないコナンは地面を睨んだ悪魔は勝ち誇ったような顔を見せた。しかしコナンは顔を上げ先ほどより自信をもった顔で悪魔を睨んだ。

「ああ、会ったときは少しは憎んだかもしれない、でも、今は憎んでねえよ。それにあいつのせいじゃない……あいつがいてくれたから見逃してしまいそうだった組織を闇からひっぱりだすことができる。あいつには感謝してるよ」

「お前ほんとに扱えん奴だ。だが今度はお前が操り人形の番だ」

悪魔はコナンに糸をたらず。しかしその糸はコナンを操ることが出来なかった。

「何故だ！！何故お前はこうも扱えんのだ！！」

怒り狂ったかのようにシーグはコナンの首を締め付けていく。そして木に向かってコナンを投げ飛ばした。そのままコナンは座り込む。ゆっくりゆっくりシーグは近づいた。体に力が入らないコナンの意識は朦朧としていた。

そんな意識を無理矢理悪魔は呼び戻した。コナンの腕を掴み痛みに耐えきれずに悲鳴を上げた。

第十一話　絶体絶命!?? (後書き)

やばい!コナンが~~~~~) ()
の状態ですかね。

さーてこの後どうなるでしょう??
お楽しみに

次回　灰原?かな
菜花

第十二話　危機一髪！??

コナンの腕を掴み木に押し当てた。

「工藤くん!!」

悪魔の手の力が抜け後ろを振り返った。そこには息をきらした灰原が立っていた。

「どうてあなたはそんなことするの？　目的はなんなの？」

悪魔はコナンを離し灰原と向きあった。

「目的なんてねえよ！　有るとしたらお前をこの世界から消し去ること！　邪魔なんだよこいつもお前もな！」

「彼は悪くないわ。犠牲者よ？　この世界から消えなきゃいけないのは私だけよ」

悪魔は笑い灰原に近づく

「ふーん。お前でもいい。こいつ見逃すかわりに俺のところへこい。それにしてもお前らって似た者同士だな。仲良く消えれば言うことなしだが」

「それ以上……灰原に近づくな」

コナンは息を切らせながら木に持たれながらも立つ。

「なんで……なんで戻ってきたんだよ？……　勝算もねえのに」

コナンは灰原を睨み付けた。しかし灰原もコナンを睨み付ける。

「あなたこそ、勝算なんてないのに残ってるじゃない！ どうして助けようとするの私なんていなかったら良かったのよ！」

「バロー！ なんでお前はいつもマイナスにことを考えんだよ！！ だからこいつにも洗脳されるんだろうが！！」

言い返せない灰原は下を向き拳に力を入れた。その手がワナワナ震えていた。会話に入る隙のない悪魔は啞然としている。

「こつちこいよ灰原！こいつに命捧げんなら俺のここにこいよ」

その瞬間悪魔が勢いよくコナンの頬を叩いた。コナンは地面にたたきつけられた。

「工藤くん！！」

灰原は悪魔を押し退けコナンの前に立ちはだかった。

そして庇うように手を広げる。敵う相手でないことは承知の上で悪魔をにらんだ。

第十二話　危機一髪！？（後書き）

もうこのはなし十話こえていたんですね！

助けに來ました哀ちゃん！

さーてどうなる！？

次回病院

菜花

第十三話　涙・一人じゃない

灰原は両手を広げ悪魔の前に立つ。そして灰原はコナンの手をしっかりと掴んだ。シーグは一気に飛びかかろうとした。灰原は目を閉じる。しかし、誰も襲っては来なかった。目を開けると灰原たちのまわりは光を放っていた。シーグはその光に触れることはできなかった。

「悪いわね。貴方に命捧げる義理なんてないわ」

その瞬間、光が一気に膨張しシーグを吹き飛ばした。

そのまま二人は気をうしなった。

次に目を覚ましたのは病院のベッドの上だった。

「哀ちゃん？　大丈夫？」

歩美は心配そうに灰原を見つめた。

「ええ……私は大丈夫。それより江戸川君は？」

「それが……どこにもいないの……哀ちゃんを森で見付けたけど、コナン君いなかった」

歩美は目に涙をためて灰原を見る。灰原は焦る気持ちを押さえる。

「大丈夫。江戸川君はすぐ見つかるわ」

歩美は大粒の涙を流して灰原にしがみついた。灰原は歩美の頭を優

しく撫でる。

（どうして？ どうして私を残して彼を拐ったの？ どうして彼をそんなに憎むの？）

灰原は歩美に見えないように一筋の涙を流した。

「ね？ 他のみんなは？」

泣き止んだ歩美に周りを見渡しながら聞いた。

「今コナン君を探しにいつてる」

「そう。ありがとう私なんかにつき合ってくれて」

「私なんか」じゃないよ。歩美にとって哀ちゃんは親友で憧れだよ？ 心配だつてするもん。哀ちゃんが泣きたいときあったらさっきの哀ちゃんみたいに慰めたり一緒に泣いたりするもん。ずっと一緒にいるもん。哀ちゃんは一人じゃないんだよ？ 頼りない歩美だけど、親友だよ？」

灰原の目から止まっていた涙が少し流れた。歩美は灰原を優しく抱き締める。そつと撫でる。

「哀ちゃんも歩美や元太君たちに必要な存在だよ？ それにコナン君にとっても博士にとっても大切な存在だよ？」

歩美の言葉が胸いっぱいにくれる。灰原は小さな声で何度も“ありがとう” っという続けた。歩美は笑顔で灰原をみた。

第十三話　涙・一人じゃない（後書き）

灰原みつかった！でもコナンが見つからない！！何処へ！？何処でしよう……

「作者が俺をイジめる……」

なんか嫌な声聞こえてきた。

「俺をどうする気だよ！？」

「落ち着いて下さい！次回みればわかるかと……活躍してるはずですよ」

アハハ……コナンが怒ってます……

すみません逃げます

（><）

「おい！！」

と言うわけでコナンから逃げて来ました。お騒がせしました。

今回歩美と灰原の友情書きたくて書きました。いかがでしたか？

（先ほどコナンとの余計な会話ありましたがすみません。要望あればまた書きますが……なければいつも通りに戻します。）

次回ある人が登場。みんなもよくしつてます。
では

第十四話　コナンとシーグ以外の人物

コナンが目を覚ました場所、それは暗い世界だった。限界に近い体を無理矢理起こす。

周りを見渡すが何もない誰もいない、頭に声も響かない暗い中コナンはたった一人だった。

「居るんだろ？　シーグ！」

叫んでみるが答える者はいなかった。

何れくらいの時間が過ぎたのか分からない。しかし頭の中でシーグ以外の声が聞こえた。

“ 頑張つてあるいて？　何処かに落とし穴があるわ ”

聞き覚えのある声、頭の中で優しい声が聞こえた。

「誰？」

“ いいから私を信じて、シーグが目覚める前に、そこから抜け出すの ”

彼女の声を頼りに起き上がり歩こうとしたが、何か黒い物がコナンの足にまとわりついていていた。必死に抜こうとする。しかしその黒い物のまとわりつく範囲が広がったことに気付いた。

「逃がさん……」

シーグの声、まとわりついてるその黒い物から聞こえてくる。

「貴方いつまで、この子にまとわりつくの？　さっきので、こりたはずよ？」

コナンが声のする方にふりむいた。

「明美さん……？」

そこには宮野明美の姿があった。

「俺はこいつの力で、まだ生き続ける！」

「あなたはもう死んでるの！ この子をこれ以上傷つけないで。貴方は現世では生きていけないのよ？ どんなに力を奪っても」

シーグは明美の話すら聞かずにコナンの足に絡む。

「なあ？ シーグ……俺の力半分だけでどうにかならないのか？」

「「えっ？」」

シーグも明美も驚きを隠せなかった。

第十四話　コナンとシーグ以外の人物（後書き）

コナン君シーグによって捕まってた〜

「あら菜花じゃない？」

「え？」

「あなた、江戸川君に何いわせてるの？　体力も限界の江戸川君に
“力半分”もあげたら死ぬわよ？」

「え…あ、すみませ！哀ちゃん！」

「私の名前きやすく呼ばないでくれるかしら？」

「ヒイイイ！すみませ！！」

「江戸川君助けないと私が貴方を呪うわよ？」

「ただ大丈夫です。誓います」

「ホントに？　約束やぶったらどうなるかわかってるわね」

「ハイイイ」

（哀ちゃん怖い……）

「なんか言ったかしら？」

「いえ……何も……」

「そう。私かえるわね」

ふう怖かった。

でも

今の約束は守ります。

次回コナンどうなるでしょう……ハハハ次回予告になってない……

では

第十五話　半分の力・帰路？

シーグはコナンの足から力を抜いた。

「お前……今なんて……？」

シーグは驚きのあまり途切れ途切れに声をだす。明美もまた驚いたままだであった。

「だから……半分の力じゃだめかって聞いてんだよ……。もし、それでお前がたすかるなら力をあげる。その代わり俺らの前に今後一切近づくな」

「無理よ！今の貴方の体じゃ半分力渡したら死んじゃうわ。無謀すぎるわ！」

「いいんだ。明美さん。俺絶対死なねえから。工藤新一に戻って幸せに暮らすまで何がなんでもしなねえから」

明美にニツコリ笑ってみせた。

「ホントにいいんだな？」

「ああ……」

シーグはコナンの体を少しずつ締め付けた。

「つつ……」

体から激痛が走った。

痛みを必死に堪える。そして、コナンからシーグが離れた。シーグ

は元の人形ひとがたに戻っていた。

「……明美さん……お願いがあるんだ……俺を元の世界に……戻してくれ」

「ええ、わかったわ。ねえ、シーグ？ もう良いでしょ？ この子を自由にしてあげても。あなたは私と一緒にあの世にいきましょ？ 折角この子が貴方に力あげたのよ。命懸けで……だからね？ 工藤新一をかせして？」

シーグは立つ。しかしシーグはコナンの腕を持っている。コナンは荒い息を必死に整えていた。

「あの世へいっても何も無い。ここならこいつがいる」

明美に怒鳴る。シーグが持つ腕の力が強くなる。コナンはその力にたえる。朦朧とする意識を必死に呼び覚ました。

「あの世で……何か見つけたらいいだろ？ もっと俺たちのためになることを……見つけたらいいだろ？」

「そうよ。シーグ？ こんな事してる暇があるなら人のためになること考えなさい」

きつく持っていたコナンの腕を離れた。それは“解放”という合図でもあった。

シーグは明美に差し出された手を握る。シーグの体が光輝き居なくなった。

「あつちの世界にいったわ。さあ貴方も帰りましょう」

明美はコナンを背負った。

「ねえコナン君？いえ工藤新一君。志保に伝えてくれない？ もう自分を捨てようとおもわないでね。前向きに生きてってお姉ちゃんからの願いだつて伝えてくれない？」

「ああ、伝えておくよ」

背中に背負ったコナンに真剣に話す。コナンも真剣に答えた。暗い中明美はひたすら歩いていく。

“落とし穴”を見付けなければコナンを返せなかった。

「あつたわ」

明美は立ち止まりコナンを下ろした。

「これ、渡しといってくれない？」

明美の掌には小さな鏡があつた。

「私がね肌身離さずもつてたもの」

鏡のうらには“A・M”と彫られてあつた。

「でも、これは……」

「いいのもう、こんな空間こわしてしまふから……もう会えないもの」

寂しげな顔でコナンを見る。

コナンはその顔をみて“ここにくるのは俺じゃなかったかも”と思った。

「ねえ工藤君。今“ここにくるのは自分じゃない”って思った？」

「え？」

的中する言葉に目を丸くした。

「顔にでてるわよ？ それに“ここにくるのは貴方しか”居ないわ。もし志保が来てたら私のところに行くって言いかねないもの。まだ志保には死んでほしくないから。貴方が来て正解。志保のためにもシ―グのためにも……ほら、この穴きえたら貴方一生戻れないわよ」

明美はコナンの背中をおした。その拍子にコナンは穴へと落ちた。

「うわっ」

「志保によろしくね」

明美は穴に落ちるコナンに向かって叫んだ。コナンはそのまま気を失った。

次目が覚めるとき平和であるように誓いながら

第十五話　～ 半分の力・帰路？～（後書き）

いや～もうすぐクライマックスですね～

「そだな」

「え……？　シーグさんじゃないですか！！　何故ゆえここに？」

「明美姉様がここへ間違えて連れてきた」

「て、天界にいつてください」

「お前の力も半分頂いたらな」

「きゃあああ辞めてください！！！！　小説書く力失いますので……」

「俺が知ったこっちゃねえよ」

「シーグ！戻るわよ！！」

「チッ後もう少しだったのに……またな！」

～ポン～

ふう、力吸われるとこだった～！　一体何がしたかったのでしょうか……

あ、コナンが帰ってこれたかは次回をお楽しみにしてください！！

次回探偵団

では

第十六話　発見

森の中をひたすら光彦たちは探し続ける。もうすぐ夜明け。三人は離れることなく深く深くもりの中に入った。森の奥へ行くにつれて景色は徐々にくらくらなくなっていった。

「あ！　コナン君ですよ！！」

光彦が木にもたれ掛かったコナンを見つけた。

「スゲー怪我だせ！博士」

元太がコナンと博士を交互にみた。

「哀君のいる病院につれていくんじゃ」

博士はコナンを背負い元来た道を折り返した。
光彦はバッチで歩美に呼び掛けた。

こちら歩美

「歩美ちゃん？　光彦です！　コナン君見つかりました！」
ほんと？

「ええ！これからそっちに向かうところです」

光彦はバッチの電源をきり走り出した。

～病院～

「哀ちゃん！コナン君見つかったって！今こっちに向かつてるって」

歩美は笑顔で灰原の元へ向かう。灰原もニツコリと笑った。

↓ 数時間後 ↓

コナンは灰原のベッドの隣に寝かされた。

目だった怪我と言えば骨折くらいだった。後は擦り傷といった小さな怪我だけだった。

「コナン君目覚まさないね……」

歩美はコナンの左手をしつかり握っている。

「大丈夫そのうち覚めるわ」

灰原のお陰で歩美は元気を取り戻した。

「そう言えば、僕たち何処に泊まればいいんでしょうか？」

「そだな。お腹も減ったし」

二人は博士に向かって尋ねた。

「そじゃその事なら特別に許可もらってここにとまってもいいそうじゃ。ご飯はお握りでいいかの？」

みんなは頷いた。元太が少し不機嫌な顔になったが歩美たちに宥め

られて了解した。

第十六話　発見（後書き）

そのままが題名になる時が多々ある私……

帰ってきた！無事？に！！無事といえるのか？？

「ちゃんと帰ってこれたみたいね」

「明美さんその節はありがとうございます」

って明美さんとコナンがきた……しかもコナンが敬語使った！
ギョ

あ……睨まれた……

静かにしときます……

「ちゃんと志保につたえてね」

「大丈夫ですよ！　菜花先生がうまくしてくれますよ。だよな？
菜花先生？」

ヒィィ

「伝えますから！睨まないでくだらないコナン君！」

「だそうです！明美さん！」

「そう。よろしくね菜花先生？」

「はい。でももう少し先です」

第十七話　記憶がないから……

　二日後

あれからまだコナンは意識をとりもどしてなかった。

「ねえこの傷。私達がつけたのかな？」

歩美が前々から気にしていたこと口に出した。

「ですよ。僕達がコナン君を傷つけたのかもしれない」

「それは――」

「お前らのせいじゃねえよ」

灰原の声がコナンの声によって消された。

みんなは驚く。ベットをみると目を覚ましてるコナンがいた。

「お前らが気にするような怪我じゃなねえよ。灰原もな」

真面目な顔でいいゆつくりと体を起こす。その時その時小さな呻き声をあげた。

「でも、僕達記憶一部ないんですよ？」

「だからお前らがやったことじゃねえっていつてんだろ」

「……でも歩美覚えてるよ。私のこの手でコナン君の首しめてたの

を……」

今にも泣きそうな歩美にも記憶がないみんなより辛い思いをしていた。

「歩美ちゃん？ あのと看“逃げて”って言ってくれただろ？ あれが歩美ちゃんの気持ちだった。ちがうか？」

「うん」

「あの言葉があつたから歩美ちゃんを助けることができた」

「ほんと？」

「ああ。だから気にすることじゃねえよ。みんな操られてただけだよ」

「」「操られてた？」「」

みんなはキョトンとした顔でコナンをみた。

「そう。まあ信じて貰えねえと思うけどお前らシーグっていう悪魔に操られてたんだ。それで俺を襲った。俺を捕まえる為にな。だからお前らの意思でやったんじゃないよ」

みんなの顔が緩んだ。

「その顔の方がおめーら似合ってるよ。深刻な顔するよりな」

一気に笑顔を取り戻した三人。しかしコナンは横目で灰原をみた。
拳に力をいれ下を向いていた。

第十七話　記憶がないから……（後書き）

目さしました！おめでとございます！

記憶が一部ないみんなは苦しんでたね

でも、コナンが慰め？てくれました（笑）

次灰原とコナン

では

第十八話　月夜

〔夜中〕

コナンは横目で灰原が起きているか確かめ話しかけた。

「なあ、お前また自分を責めようとしただろ？」

「え！？」

灰原は驚きコナンのほうをみた。

「私は見つかったのにどうしてあなたは見つからないの？ どうして私じゃなくあなたを苦しめるの？」　ってこんなことずっと思っただろ？」

灰原はコナンから目をそらした。

「んなくだらねえこと考えて自分せめて参っちゃったら意味ねえだろ？」

「くだらないって?!」

灰原の声が一気に上がりコナンを睨んだ。

「俺のことで悩むのがくだらねえことだよ。俺あの後また暗い世界にいたんだ」

「え……?」

「別に何もされてねえけど強いていえばシーグに半分の力あげた……」

「な、なんで？　なんであんな奴に力なんてあげるの？　貴方死にかけたのよ？　どうしてむちゃばかりするのよ！」

灰原の怒りとは別に涼しげコナンは笑っていた。

「何笑ってるのよ！？」

「いや一緒だなんて思ってたな」

「一緒？」

「ああ、あんとき俺とシーグ以外にもう一人いたんだ。お前の身近な存在の人がな」

「まさか……」

「そのまさかだよ。お前の姉宮野明美。お姉さんにも止められたよ“無謀すぎる”って。でも俺はシーグに力をあげた。シーグってさ寂しかったんじゃないかな。あの暗い世界にずっといて、俺たちを捕まえることで寂しい気持ちを紛らわしてたんじゃないかな。でももう大丈夫だから、明美さんと一緒にあの暗い世界からシーグ出れたからもう何もしねえとおもうぜ。約束もしたしな」

「貴方あれだけ傷つけられてよくそんな事いえるわね……」

「あいつだから言えるのかもしれないな。それと、はいこれ」

「何……これ」

コナンは小さな鏡を灰原に渡した。

「明美さんから灰原に」

月明かりに照らされたその鏡をみて彫られているイニシャルに気が付き自然と涙が溢れた。「あと、伝言……」

「え……？」

「もう自分を捨てようとしなくてね前向きでいきてねって言うってたぜ？」

月明かりに照らされた灰原の肩が震えていた。コナンはその震えが止まるまで静かに待ち続けた。

「工藤君……ありがとう」

大事そうに鏡を抱き締めながら灰原は泣き続けた。

第十八話　月夜　（後書き）

久々の投稿ですかね（苦笑）

今回は

コナンと灰原の会話でした！

お待ちかねのかたありがとうございます。
なのに

上手くかけませんでしたね（苦笑）

では

第十九話　感謝・ありがとう／さよなら

（朝）

灰原は鏡を抱いたまま寝ていた。それに気付き微笑むコナン。周りをみてまだ全員が寝ていることに気付き、時計を見る。五時半をさそうとしていた。

（ちょっと早く起きすぎたか）

胸の中で軽くわらった。が、頭に激痛がはしる。

「あ……」

絶えきれずに声がもれた。

（これがおまえを苦しめるのは最後だ）

（シーグ？）

頭に響く声に少し懐かしい気がした。

（おまえに出会って良かったよ。なんかスッキリした。それに、俺消えずに過ごせるありがとう）

（どういたしまして……）

（ただそれだけがいいたかった。じゃあな）

（ああ）

シーグが消えると同時にコナンの意識も消えた。

次に目を覚ましたのは昼前だった。
少し汗をかいた体を起こした。

「コナン君やっと起きた！ 大丈夫？ 少し苦しそうだったけど…」

「ああ、大丈夫。ワリイまたみんなに心配かけたな」

「いえ、いっぱい頼って下さい」

三人は笑ってコナンに近づいた。

「そだぞコナン！ 俺たち探偵団だからな！」

「サンキュー」

コナンはニカッと笑ってみせた。

「じゃあね私たち外探検してくるね」

「ああ。気をつけろよ」

走って廊下にでていった。

「で？ ほんとに大丈夫なの？」

みんなを見送ったコナンに灰原はキツい目で見つめた。

「あん？」

「だから、さつき……」

「大丈夫だよ。シーグが別れを告げにきただけだ」

「え？」

「“ありがとう”って言いに来たんだよ。まあ激痛に絶えきれずに意識失ったけど」

「またむちゃして自分の体大事にしなさいよ！それで、もう何も起きないの？」

「ああ、大丈夫だ。それに大事にしてるぜ」

コナンはいつもの生意気な顔で灰原をみる。

「力他人にあげる人に言える言葉じゃないわよ」

呆れた顔に微笑むコナンがいた。

「やっど、怒っている顔以外の見せてくれた」

ふっとみた真剣な顔のコナンに一瞬灰原の心がドキッとした。

（どうして？……どうして工藤君にドキドキしてるのよ。バカじゃないの私）

「おい？ 灰原？ どうした？」

「な、なんでもないわよ」

コナンの顔を見れずに布団に潜った。

「なんだよお前」

コナンは啞然とした顔で布団に潜った灰原をみた。

第十九話　感謝・ありがとう／さよなら（後書き）

シーグ別れを告げにきました！！

「ちゃんと先生？？」

「え？　あ！久しぶり哀ちゃん！」

「だから気安く名前呼ばないでくれるかしら」

「す、すみませ」

「それより私がどうして工藤君にドキッとしてるわけ？」

「え？だって日ごろみてたら好きってオーラでてるよ」

「だ、だれがあんな男／＼／」

「哀ちゃん顔あかいよ？　それに焦ってるってことはやっぱり彼のこと」

「す、すきなわけないでしょ！！　あなたにも毒薬のますわよ！？」

「それは遠慮します……」

「なら黙ってないさい！！」

「は、はい……（やっぱり好きなんだ）」

ギョ

「なんかいった？」

「いえ！何も！！」

あゝ哀ちゃんおこらせてしまいました。
怖いです

では

最終話〜自信家〜

〜一週間後〜

この日コナンは退院日だった。擦り傷程度の傷はほとんど治っていた。

「コナン君、腕大丈夫？」

「ああ、もう大丈夫だ」

とは言うもののまだコナンの腕には包帯がまかれていた。

「掌の傷残ってしまったわね……」

灰原はコナンの掌を見て悲しい顔つきになった。

「ああこれか、月日がたてば跡なんてのこんねえよ。気にすんなって！」

コナンは、笑って灰原をみた。灰原から不安な顔はきえなかった。

「ほれ君たち早く車に乗らんとおいていくぞ」

「あ、おう！ ほら灰原いくぞ」

「ええ」

「いつまでも気にしてたらいつまでたつても前に進めねえぞ？ 怪我したって生きてんだからそれでいいだろ」

「いいわけないじゃない！！ あなたが傷つくことは、みんなにと

つても傷つくこと。それだけ思われてるの！あなたはそれだけ愛されてるの！」

灰原は怒鳴ってからハツとした。ここはみんなが居ることを怒りのせいでわすれていたのだ。

「その言葉オメーにそっくりそのままかえしてやるよ」

コナンは生意気な顔で笑っていた。まわりに人がいることにお構いなしだった。

「え……？」

「お前が死ぬ事でほかのみんなが傷つく。お前が今回やろうとしてたことはみんなからすると絶対やってはいけねえことなんだよ！わかれよ！お前は独りじゃねえんだよ。自分に自信もてよ！」

灰原の胸にコナンの言葉が刺さった。あの日歩美と一緒に泣いてくれた時を思いだし灰原はフツと笑った。

「そうね。独りじゃないわね」

「もうバカなまねすんなよな」

「お互いね」

言い返されコナンのムスツとした顔でこの話の幕が閉じた。嵐のような灰原の心は春の木漏れ日のような穏やかな心に変わっていた。

（やっぱり凄いわね。この自信家に私はどれだけ助けられ、どれだけ好きかしってる？ 工藤君）

先に車に乗り込み光彦たちに質問攻めにされてるコナンにほほえんだ。

「あーいちゃん！ 早くしないとおいでっちゃんよー！」

歩美の綺麗な声に導かれるように博士のビートルに乗り込んだ。

「良かったな」

小声でいうコナンの顔をみると一瞬ウィンクをし、またみんなと喋り始めた。そのつど灰原の顔がほんのり赤くなった。

（志保をありがとう工藤君）

「え？」

みんなと喋っていたコナンの頭の中に囁かれた小さな声に少し周りを見渡した。

「どうしたんですか？」

「いや……なんでもねえよ」

頭の中に聞こえてきたのが明美の声だとわかり胸を撫で下ろした。

（お礼するなら歩美ちゃんにだと思っぜ？）

心の中で囁きかけた。

（そうね。あなたたちみんなに感謝よね）

（そだな）

「コナン君？大丈夫？なんかボーンとしてるよ。まだ体調悪いの？」

歩美の不安げな顔がコナンの間近にあった。

（そろそろお別れね。ありがとう）

（ああ）

「大丈夫。なんもねえから」

「ほんと？」

「ああ」

「良かった！！」

不安げな顔から一転して明るい顔になりニコニコ笑い灰原のほうに歩美はむきかえった。

「今日は帰ったらパーティーじゃな」

「「「やったー！！」」」

博士の一言で車の中が一段とにぎやかになった。

完

2008年4月7日

最終話〜自信家〜（後書き）

もし、あなたが普通の日常からこのような非日常的なことにさらされたとき貴方はどうしますか？

もし、仲間がさらわれ自分しか助けられないとなった時勇気をもつて立ち向かえますか？どんな事があっても……

バカ見たいな話ですがこれに似た現実がおきたならば勇気をもって助けてあげて下さい。人生の中で絶対な確率で仲間にあいます。その仲間はかけがえのない存在になるでしょう

仲間がいるから自分がいられる。その仲間が支えてくれているから自分が不自由無く生きれるのだから

家族

親友

友達

彼氏彼女

近くにはたくさん仲間がいます。

大事に守ってあげてください。

仲間を信じてあげてください。

よんで頂き有り難うございました。

この話かいていて最後にたどりついたのは
信じる気持ちと仲間かな。

はじめはこんな話になるなど思ってもいませんでした。
作るにつれ出来た話。イマイチ展開の分からなかった方すみません

ごめんなさい

では

2008年4月7日

菜花

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7637d/>

悪魔のいる村

2010年10月11日05時08分発行